

古アッシリア時代の錫交易と土器の分布

小口裕通

Old Assyrian Tin Trade and Ceramic Distribution

Hiromichi OGUCHI

古アッシリア時代の錫交易とハブル土器の分布との関連性が問われて以来、久しくこの問題が検討されることはなかったが、近年の発掘調査はその再検討を可能にする新たな考古・歴史学的な情報を提供してくれている。この現状に鑑み、本稿では土器分布の解釈という観点に立ち、また考古学の一課題である人と物との関係の解明ということを念頭に置いて、その関連性についての再考察を行う。その結果、ハブル土器の、特に主要分布域外での出現の一部は、明らかに錫交易路との関係で論じることができるものであることを、我々は新たに認識するに至る。だが、一方では、政治、軍事、錫交易以外の経済的な側面から解釈できる部分が、その土器分布に見られることも知り得る。

キーワード：古アッシリア時代、錫交易、ハブル土器、土器分布、キャロル・ハムリン

Since Carol Hamlin suggested that Old Assyrian tin trade and Assyrian trading activities might be connected with the occurrence of Khabur ware in the Ushnu-Solduz valley of northwest Iran (1971, 1977), more than two decades have passed. Seeing that archaeological and historical data have increased through recent excavations, a reappraisal of her suggestion has now become possible. When we remember that "delineating and explaining relationships between artifacts and human populations is a fundamental concern of archaeology" (Kramer 1977 : 91), we appreciate that such a suggestion also makes sense. In particular, the distribution of Khabur ware, showing secondary diffusion outside its main distribution zone, can be not only treated as an interpretive model of ceramic distribution, it enables us to explain archaeological data in historical perspective. When the breakdown of data concerned with the occurrences of Khabur ware at such peripheral sites as are marked as secondary distribution is done in terms of time and space, and when historical data are further taken into consideration, we perceive that part of the secondary diffusion of Khabur ware almost certainly denotes the places through which tin trade routes frequently used by Assyrian traders passed, and that the others can be explained in political and/or economic aspects, and/or through military actions.

Key-words : Old Assyrian period, tin trade, Khabur ware, ceramic distribution, Carol Hamlin

はじめに

M.E.L. マロワン (Mallowan) が命名した前2千年紀の北メソポタミアの彩文土器、すなわち「ハブル土器 (Khabur ware)」(Mallowan 1937 : 103)について、その分布と古アッシリア時代の「錫交易」との関連性ということを最初に問題にしたのは C. ハムリン (Hamlin) である。ハブル土器を含む、ディンカ・テペ (Dinkha Tepe) 出土の土器群を分析したハムリン (Hamlin 1971) は、その遺跡でのハブル土器の出現を古アッシリア時代の錫交易に伴う副次的な結果としての土器の伝播であると見做し、その遺跡のあるイランのウルミヤ湖の南西地域に当時の錫交易のルートが通っていたのではないかと考えたのである

(Kramer 1977 : 105)。錫交易に結びつけようとする考え方の背景には、当時の錫交易のアナトリアでの中心地でも、ハブル土器が出土するという事実の考慮があったからに他ならない。そこでは、北メソポタミアの都市アッシュール (Aššur)¹⁾ から来た人々が交易の拠点を設け居住していたことが文献上、知られていた。このことは、ディンカ・テペやその近くの遺跡ハサンル (Hasanlu) でのハブル土器の出土と相俟って、イラン北西部にも、アッシュールの人々の交易の拠点があったのではないかという疑問を生じせしめ、上記のようなハムリン (= クレイマー) の考えとなつたわけである。

しかし、ハムリンはその考えを問題提起に止め、論証す

るまでには至っていない。北メソポタミアから外れた遺跡でのハブル土器の発見が、その時には今日知られるほど多くなく、そのために問題提起という以上の論の展開にまで及ぶことができなかつたのである。また、ハブル土器自体についても、基本的な問題が未決のままであったので、論を展開するためにはまず、その土器の年代幅、時期細分、細分された時期の年代推定が要請されたのであるが、ハムリンが研究を行った当時は、それらの問題を解決するためのデータが十分ではなく、例えば時期細分については結局未決問題として処理せざるを得ないのが実状であった。これも、論の展開を行おうとする以前の障壁となつた。さらには、古アッシリア時代の錫交易の年代枠の設定も、特にその下限年代という点で問題が残されていた。つまり、その論証には、ハブル土器の細分された時期と錫交易の年代枠とを組み合わせて考えた上で、その錫交易と同時期と判断できるハブル土器出土層をもつ遺跡の特定を行い、錫交易とハブル土器の分布との関連性についての検証を行うという過程が必要となるわけなのである。

さらに問題はハブル土器の分布形態の適確な把握という点にもあった。それは、分布の核となる地域から分岐して三方向への拡散を示す。このような分布形態は、近年の発掘調査からの情報を加えるとより顕著に看取できるものであるが、データ不足ということもあって、ハムリンの研究の時点ではまだ曖昧さを残したままであった。議論を進める上での前提として、その核となる地域の境界を確定し、拡散を示す周辺末端遺跡との間の区分を明確にしておく必要があることは言うまでもあるまい。また、このような三方への拡散という事実は、錫交易との関連性ということだけで、ハブル土器の周辺末端遺跡での出現を説明できないことを示唆するものもある。つまり、ハムリンが土器の拡散=民族移動という紋切型の論理が常に成り立つとは限らないと指摘するように(Kramer 1977)、この場合にも錫交易に限った、いわゆる短絡的な土器分布の解釈のみに止まらず、場所ごとに歴史的状況を考慮した上での異なつた説明が要請されることになる。

本稿では、まず当時の錫交易に係わる問題点を探るとともに、年代を考慮した上で、周辺末端遺跡でのハブル土器の出現について、どのような説明が可能かという点を明らかにし、そのなかで、錫交易と関連づけて論じることができるハブル土器の分布の特定を行い、さらに北メソポタミアとアナトリアとの間の錫の交易路について若干の考察を加える。従って、この論考は、土器分布の歴史的解釈の試みでもあり、また、考古学でいうところの「接触(contact)」の具体的様相を説明する試みでもある²⁾。

アッシュールの「錫交易」

いわゆる「古アッシリア時代」の歴史がかなり知られる時期は、中央アナトリアの遺跡キュルテペ(Kütepe)のカールムII層とIb層の時期である。両層ともにアッカド語の古アッシリア方言で書かれた粘土板文書を出土し、その文献資料が当時、都市国家アッシュールとアナトリアの諸都市の間で行われた交易のようすを明らかにしてくれるわけだが、それは周知の事柄であろう。

この交易は、アッシュールに住む人々が、国家の統制のもとに、家族単位で営んだ商業活動であり、言うまでもなく、とある場所から錫を輸入して、さらにはバビロニアから織物を輸入、共にアナトリア方面に再輸出するというかたちで行われた、所謂「中継貿易」であった(図1)。このアッシュールの、いわば商人たちは、家族の一員をアナトリアの諸都市に派遣して、現地の商業業務に当たらせた。アッシュールから派遣された人々はアナトリアの諸都市のなかに居留区を設け、そこに在住して商業活動を行つたが、その居留区が当時、カールム(kārum)と呼ばれ、さらにはそれより小規模なものがワバルトゥム(wabartum)と呼ばれていたことは現在、普く知られている。文献上、キュルテペのカールムII層の時期には少なくとも10都市にカールムが存在したことが判明している。同様にワバルトゥムがあった町も10ほど知られる。そのような居留区はアナトリアのみならず、ほかの地域にもあったようで、例えば、上記10都市のカールムのうち、一つは北シリア、バリーフ川沿いのザルパ(Zalpa)³⁾という名の都市に存在していたことが、文献上の研究でわかっている⁴⁾。アナトリアで中心的な役割を果たしたカールムがキュルテペすなわち都市カニシュ(Kanış)にあった。アッシュールの錫と織物はまずカニシュへもたらされ、そこからアナトリアの各居留区へと運ばれ売られた。そして、アナトリアでは、当時貨幣として機能した銀、あるいは場合によっては金での支

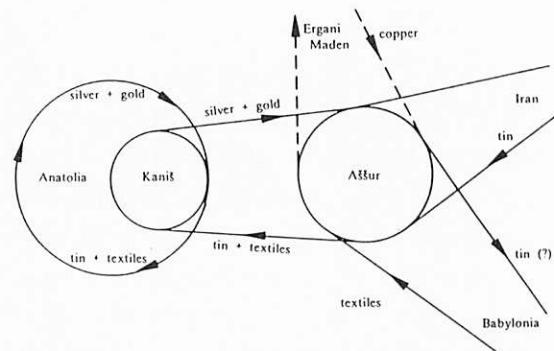


図1 古アッシリア時代の交易システム
(Gerstenblith 1983: Table 2-Larsen 1967: 172の図の改変作成)

払いがなされ、それは居留区から本国に送金されたのである。アッシュールの商人たちはこの交易を行うにあたり、アッシュールでの輸出税、カニシュに至る経由地における通行税、居留区の商業管理施設に対する税、居留区のある都市の支配者に対する輸入税というように様々な税を課せられたが、それにもかかわらず、交易活動は100年以上続いた。砒素を混入した銅製品から錫を入れる青銅製品へと技術的変遷を経た前3千年紀の後、青銅製品の需要はさらに急増する⁵⁾。これが前2千年紀の前半、つまり中期青銅器時代である。そのような時代背景において、このような錫の交易が大きな利潤を生み出したことは疑いない。それが、アッシュールの錫交易が継続した最大の要因であろう。

錫はどこからもたらされたのか？

実は、文献学上、キュルテペ出土の粘土板文書に見られるような、今日「錫」と訳されるアッカド語の言葉が、本当に錫を示すものかどうか、問題になったことがある⁶⁾。それはアンナクム(*annakum*)⁷⁾という語である。論議は錫か鉛かということで、二つに分かれたが、現在では大方、アンナクム=錫ということで研究者間の意見の一致が見られる。ただ、そこには別な問題もあった。それは、錫を埋蔵する鉱床がメソポタミアはもちろんのこと、その周辺地域においても皆無であるという事実で、とすれば、アッシュ

ルの人々はどこからアンナクムすなわち錫を輸入したのか、大きな疑問となつたのである。近年に至るまで、銅などの鉱山を豊富に有するアナトリアでさえも、錫の鉱脈はないと思做されていたので、文献に見られるアンナクムを錫だとすれば、そのような疑問は募るばかりであった。とはいえ、大方の文献学者は証左なくして、錫の原産地をアッシュールの東方に求めた。

しかし現在では、1986年に発表されたT.ステチ(Stech)とV.C.ピゴット(Pigott)の論文がその疑問に対する解決の糸口をあたえてくれる。アフガニスタンに豊富な錫鉱床が存在することが、国連の援助による鉱物資源調査の報告を基盤にした、その論文を通じて明らかにされたのである(Stech and Pigott 1986: 44)。こうして、ラピスラズリと同じように、錫もアフガニスタンからもたらされた可能性が高いと考えられるようになってきた(図2)。

だが、1987年、キリキア地方の北西の中央タウルス山脈中で錫の鉱山が発見されたことが報じられ、学界にセンセーションを巻き起した(Yener and Özbal 1987)。発見された場所はボルカルダー(Bolkardağ)という山である。引き続きこの地域で調査を行ったK.A.イエネル(Yener)は、さらにカステル(Kastel)という場所で、採掘された錫鉱山の跡を発見した。抗道入口の作業場の跡からは土器が出土し、採掘が前3千年紀に行われていたことを示す証

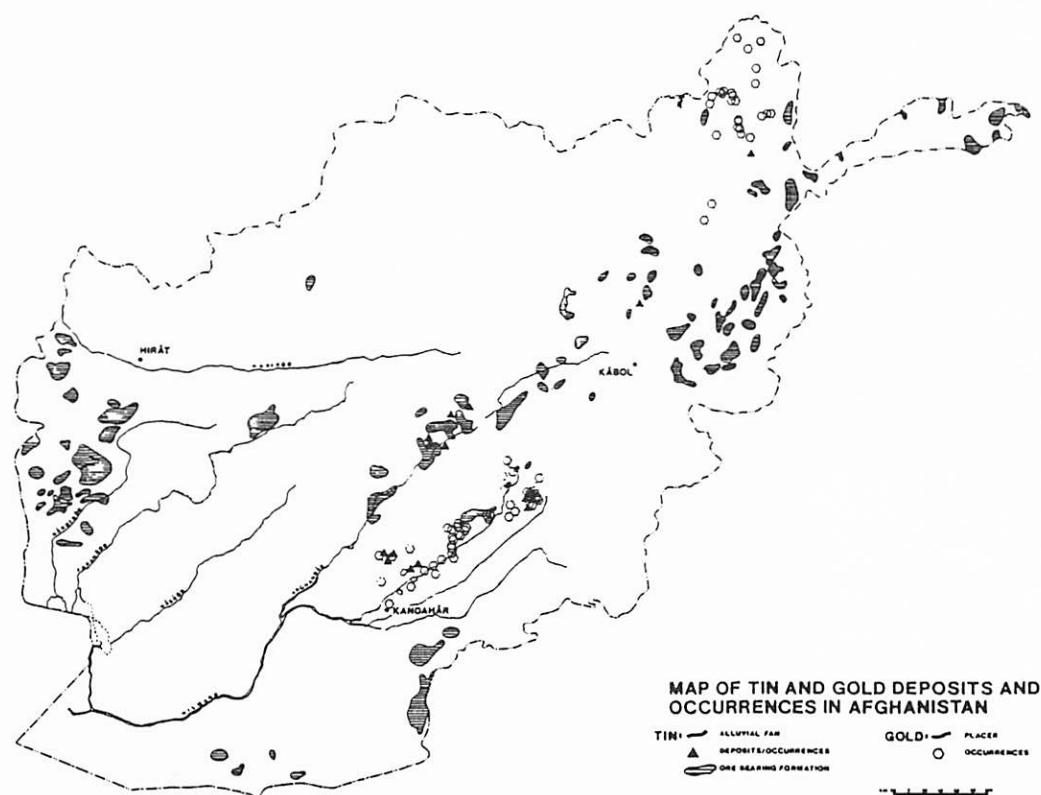


図2 アフガニスタンの錫の产地 (Stech and Pigott 1986: 40)

拠だといわれる (Yenel and Vandiver 1933: 213-214)。その近くで調査された前3千年紀の遺跡ギヨルテペ (Göltepe) では、表土上に石製の鋳型や鉱滓、鉱石、粉碎用の石製道具の散布が認められ、そして発掘の結果、金属を溶融したと考えられる土製の坩堝の出土をみた (Yenel and Vandiver 1933: 216-219)。この地の北東にはキュルテペがあり、当然この点においては、中央タウルス山脈地帯で錫の入手が可能であるのに、なぜアナトリアの人々はわざわざ遠方よりもたらされた錫を購入したのかという疑問が生じ、さらにそれは、アンナクムとして記録されたものが本当に錫であったのか否かという疑問にまで繋がる。しかし、タウルス山脈は鉛の産地であり、アンナクムは鉛とは考えられない。とすれば、やはり錫と考えざるを得ない。ここで考慮すべきことは、(1)鉱山が採掘された時期、(2)鉱山における錫の産出量、(3)錫の価格の問題の三点である。イエネル自身は、カステルの鉱山が前3千年紀に採掘された証拠はあるが、前2千年紀に果たして、増加する錫の需要に応えられるだけの産出量をもっていたかどうか、疑問視している (Yenel and Vandiver 1933: 212)。加えるに、前2千年紀に採掘された証拠はないのである。また、キュルテペ出土文書は、確かに多量のアンナクムがアッシュールからアナトリアへもたらされた事実を語っている。この問題に関して、現在最も妥当な意見を述べているのがJ.N. ポストゲート (Postgate) である。ポストゲートは、たとえ前2千年紀に中央タウルス山脈中で錫の採掘が行われていたとしても、安価で安定した錫の供給という点では、アッシュール経由で運ばれたものがより勝っていたと考えざるを得ない、と述べているのである (Postgate 1992: 212)。

ただ、アッシュールでは、発掘がこの時期の都市の全貌を明らかにする段階にまで至っていないこともあり、古アッシリア時代の文書も未だほとんど発見されていないのが現状であるので、今後、この時期に属する多くの商業文書がこの遺跡で発見される可能性は大であって、そこからアッシュールの東方方面に対する商業活動の実態や錫の産出地などに関する情報が得られる可能性がある。このことは、このような議論を展開する場合、常に念頭に置いておく必要がある事柄であろう。

錫はどのような形態で運ばれたのか？

錫は主に「錫石 (cassiterite/tin-stone)」と呼ばれる、錫の有用成分を多く含有する鉱石のかたちで、あるいは鉄や銅などの硫化物を含む硫錫石 (stannite) となって産出される。あるいは風化によって鉱脈から分離した錫石が砂礫と共に河床に堆積した状態 (砂錫) で見出される場合もある。では、アフガニスタンからアッシュールを経由してアナトリアへもたらされた錫は「鉱石」のまま運ばれたのか、「錫

塊」として運ばれたのか、どちらであったのだろうか。

キュルテペ出土の文書によれば、布で包まれ封印された錫 (*annak kunukkim*) と、封印されず自由に使える、文字どおり「手元」にある錫 (*annak qātim*) が、袋状の入れ物に詰められ封印されたバビロニアからの織物と共に、口パに乗せられて運ばれたという。封印されていない錫は旅費や通行税などに費やされ、封印された錫が売り物となつた。様々な税の支払いを逃れるため、密輸 (*pazzurum/paz-zurtum*) も事実上行われていたことも記録されている。しかし、このような情報を伝える文書は、錫の運搬が鉱石のままで行われたのか、あるいは錫塊としてなされたのか、記録するまでには至っていない。

ただし、古バビロニア時代の文書やマリ文書では、錫が「錫塊」と解釈される言葉 (*lē'u/lū*) (Oppenheim et al. 1973, Vol. 9: 159 4'd) と共に記載される場合があり、また、メソポタミアからのものといわれる文書では、「純粹 (*zakū*)」 (Oppenheim et al. 1961, Vol. 21: 24 4.) な錫という言及がなされることもある。この点に着目したP.R.S. モーレイ (Moorey) は、錫塊に加工されたかたちで錫が運搬された可能性を示唆している (Moorey 1985: 128)。考古学的証拠としては、時代は下るが、テル・アル・リマ (Tell al-Rimah) の発掘区Aの第1b層の建物の中庭からの、T字形の錫の錫塊 (重さ1820グラム) の出土がある (Postgate et al. 1997: 26)⁸⁾。この発掘区Aの下層では、ジックラトを擁する有名な神殿が発見されているが、そのことは言うまでもあるまい。第1b層の建物には、錫や穀物を取り扱う商人たちが住んでいたようであり、甕に入れられた粘土板文書が関係遺物として発見されていて、それらの幾つかはアッシリア王シャルマネセル1世(前1273-1244年) あるいはトゥクルティ・ニヌルタ1世(前1243-1207年) のリンム (*limmu*) によって年代付けられるものであった (Postgate et al. 1997)。正に中期アッシリア時代全盛期なわち前13世紀に属する錫の錫塊である。

錫をなるべく安くして多量に売り儲けるためには、効率よく運ぶ必要があり、そのためには、鉱石よりは錫塊にして運搬するのが道理に適った運び方である。また、上記の僅かな文献・考古学的証拠から見ても、当時錫は錫塊のかたちで運ばれ売買されたと見做すほうが当を得ているように思われる。もしそうだとすれば、どこかに製錬・錫造所あるいはその施設群があったはずで、それをアフガニスタンに求めるべきか、アフガニスタンからアッシュールに至る交易路上で探すべきか、さらに興味深い問題がそこに生じてくる。とはいものの、現状では問題の解決は不可能である。今後の調査に期待するしかないであろう。

歴史的観点からの年代枠の設定⁹⁾

さて、ここで問題とするキュルテペ・カールム II 層と Ib 層の年代について考えてみよう。それが議論を進めていく上での前提となるからである。

文献学上、カールム II 層の時期はアッシュールの王エリュム 1 世の時に始まり¹⁰⁾、プズル・アッシュール 2 世の時まで続いたと考えられる。アッシリアの王名表では、エリュム 1 世（40年間の治世）とシャムシ・アダド 1 世（33 年間の治世）の間の王の治世年数が不明であるので、絶対年代の計算ができない。しかし、カールム II 層の時期は、様々な理由において前19世紀に属するものと見做されている。キュルテペでは、同じカールム区域のなかで、その第 II 層の下にさらに第 III、第 IV 層というように二つの生活層の確認がなされているが、これらの両層は、第 II 層の時期推定から考えて、前20世紀に属するものと見做される。第 III、第 IV 層に居留区カールムがあったかどうかは不明であり、アッシュールの錫交易がいつ始まったのかという疑問と相俟って、歴史上の一つの問題となっている。

アッシュールではエリュム 1 世の後、イクヌム、サルゴン 1 世、プズル・アッシュール 2 世、ナラム・シン、エリュム 2 世と王が続き、王位の篡奪者であるシャムシ・アダド 1 世へと政権が移り変わるが、キュルテペ・カールム II 層の時期には、アッシュールでは四人の王の継承が行われたことになる。カールム II 層は大きな破壊を被り、一時放棄されるが、カールム Ib 層として再建されるに至る。その破壊で残った第 II 層の商業文書の多くはサルゴン 1 世とプズル・アッシュール 2 世の時期のものであり、それはアッシュールの錫交易の最盛期だともいわれる。そして、キュルテペすなわちカニシュにおける破壊はアナトリア内部の抗争によるもので¹¹⁾、とはいえたナトリアのすべての都市や町のカールム、ワバルトゥムにまで危害が及んだわけではないと考えられている（Veenhof 1985: 193）。ちょうどその頃、アッシュールでも、政変に見舞われる。エシュヌンナ王ナラム・シンが上部ハブル地域へ進軍し、その路線でアッシュールの王位を奪ったのである。アッシリアの王名表で37番目に王として記載されるナラム・シンがその人物である。彼の後を継いだエリュム 2 世は、王名表ではナラム・シンの子とされているが、実際にはだれの子であったのか、不明である。アッシュールの対岸のやや北に位置する遺跡テル・ハイカル（Tell Haikal）に比定されるエカラトゥム（Ekallatum）¹²⁾を拠点としていたシャムシ・アダド 1 世は、エリュム 2 世が王位に就くとともになく、アッシュールを攻略して王位を奪う。これは、前1814 年の出来事である。次いで、彼の王国の首都を上部ハブル地域のシェフナ（Sehna）＝テル・レイラン（Tell Leilan）

に定め、シュバト・エンリル（Šubat-Enlil）と改名、さらにはユーフラテス中流域の交易都市マリ（Mari）を攻略して、周辺地域の征服に乗り出す。折しも、カニシュでは、カールムの再建（Ib 層）がなされ、アッシュールとカニシュ間の錫交易が再開されるに至っていた。この両都市間の交易を再開に導いたのは、シャムシ・アダド 1 世であったかもしれない。

アッシリアで初めての「領域国家」を建設したシャムシ・アダド 1 世（前1813-1781年）に直接関わる文書はキュルテペ・カールム Ib 層からは出土していないが、文書の年を示すリンムの研究で、第 Ib 層出土のリンムを記す文書がこの王の時期のものであることが分かっている（Balkan 1955: 42-44）。一方、第 Ib 層出土の印章の様式からの研究では、この層の生活がバビロンのハンムラビの治世（前1792-1750 年）の終わり近くまで、あるいはハンムラビの後継者サムスイルナの治世（前1749-1712年）の最初の10年目ぐらいまで続いていることが、示唆されるに至っている（Buchanan 1969: 758-759；N. Özgüç 1968: 319）。加えるに、テル・アル・リマー出土の文書のなかに、ハンムラビに対して臣下の礼をとっていたカラナ（Karana）の支配者ハトヌ・ラビやその妃イルタニの時期に年代付けられる文書があるが、文書中には錫に関する言及がしばしば現れる（Oates 1968a: 137；Dalley 1984: 64）。そして、同遺跡の所謂イルタニ文書中には、カニシュの名も現れた（Oates 1968a: 137；Dalley 1976: 31-32）。さらに、テル・レイラン出土の文書のなかには、シュバト・エンリルが再度改名されてシェフナとなった町の支配者ティル・アブヌとアッシュールとの間の条約に関する文書があった（Eidem 1987-88: 115, 1991: 127）。ティル・アブヌはハンムラビがマリを戦いで破った年（前1761年）と、サムスイルナによって破壊されることになる（前1728年）シェフナの最後の支配者ヤクン・アシャルの治世との間に、年代的に位置付けられる人物である。つまり、シャムシ・アダド王国崩壊の後もアッシュール自体がまだ重要な役割を果たしていたことを示すものであった。当時の政治状況を考えるに、おそらく、その役割とは錫交易以外には考えられない。従って、アッシュールとカニシュ間の錫交易は前1750/40年頃まで続けられていた可能性が高いといえる。

アナトリアでは、このキュルテペ・カールム Ib 層の時期に、政治的変動が起こる。キュルテペのカールム地区からではなく、遺跡の主丘をなす防壁によって囲まれた行政区画の Ib 層と同時期の建物から出土した一通の手紙が当時の様子をある程度明らかにしてくれるのだが、その手紙はママ（Mama）という國の支配者アヌム・ヒルビからカニシュの支配者フルシャマ宛のもので、対等の立場で書かれ

たものであった (Balkan 1957: 8; Orlin 1970: 99)。ママはカールム II層の時期にはカニシュの下位に列する小国であったが、カールム Ib 層の時期にはカニシュと同じように、臣下国として小さな都市国家を包含する領域 (*mātum*) を形成するまでの国となっていたのである。言い換えれば、第 II層の時期にも領域を形成する国はあったものの (Orlin 1970: 73)、この手紙は第 Ib 層の時期にさらに新たな大国が出現したことを示唆するものであった。第 II層から第 Ib 層の時期にかけて、ママにはワバルトゥムが存在し続けていたが、第 Ib 層の時期には、第 II層の時期にワバルトゥムであったものがカールムへ昇格したり、またカールムやワバルトゥムが新たに設けられた都市や町もあった (Larsen 1976: 237-240)。さらに加えるに、当時の状況を知る手がかりを与えてくれる史料がもう一つある。それは、後世の写本である、ボガズキヨイ (Boğazköy) 出土の所謂「アニア文書」¹³⁾ であり、クシャラ (Kuššara) の支配者ピトハナがネシャ (Nesa = Kaniš) を占領したこと、その息子であるアニアがネシャの防御を固めると共にそこを拠点としたこと、ピトハナと共に軍事行動をとっていたアニアが引き続きネシャから周辺諸国の征服を行ったことなどを伝えるもので、その内容は、正に一都市国家による広範囲なアナトリアの支配を示す記事と見做すことができるものであった (Orlin 1970: 238-239, 242-245)。キュルテペ・カールム Ib 層出土の粘土板文書のなかに 6人の王を記載するものがあり、ワルシャマとその父であるイナルと共にアニアの名も列挙されていたので、アニアは第 Ib 層の時期の人物であると考えられ、また、キュルテペの主丘でのアニアの銘をもつ青銅短剣の発見と、ネシャと（カ）ニシュというような音の類似は、ネシャ=カニシュという推定を可能にしている。もしもこの推定が正しいとして、関係史料からの情報を総合すると、第 Ib 層の時期の前半にカニシュの支配者としてイナルとワルシャマがいて、その後半にピトハナとアニアが出現しカニシュ=ネシャを支配したということになるわけである (Orlin 1970: 245)。つまり、カールム II層の破壊によって示唆されるように、第 II層の終了近くにはカニシュを凌駕する強国が出てきたが¹⁴⁾、第 Ib 層の時期にはさらにカニシュと肩を並べる新たな大国の出現をみて、遂には、たとえ一時的ではあったとしても、ヒッタイト以前の、アナトリアでの統一国家の出現をみたと見做すことができる。これが第 Ib 層の時期である。その層の居住の終了は、前述したように、アッシュールによる錫交易の終焉を意味する。またそれはカニシュ=ネシャを拠点とするアニアの広域統一国家の崩壊をも意味するのだろうか¹⁵⁾。いずれにせよ、キュルテペではカールム Ib 層の建物も破壊を受ける。そして、その後、その上のカールム Ia 層では第 Ib 層の建物が再利用されたり、また第 Ib

層の建物の瓦礫の上に新しい建物が建てられたりして、再びそこで居住が再開されるわけであるが、もはや第 Ia 層の後にこのカールム区域で生活が営まれることはなかったのである。

ここで、以上のことまとめると、キュルテペ・カールム II層の時期は前1900年頃から前19世紀後半のある時点まで (カニシェでの交易活動はここで中断するが、その活動を継続する居留区もなかにはあったと仮定する)、カールム Ib 層は暫定的にシャムシ・アグド 1世のアッシュールにおける治世第 1 年 (前1813年) を始まりとして、前1750/40 年までの期間と年代設定ができるよう。従って、アッシュールとアナトリアの間の錫交易についても、この二つのフェーズ (phase) で分けて考える必要が生じる。言い換えれば、これらがこの論考の対象となる時期である。

ハブル土器の分布

ハブル土器は北イラクとシリアの上部ハブル地域の遺跡から出土する彩文土器で、前1900年頃に出現し前1400年頃まで、すなわちミタンニ時代に至るまでその地方で使われ続けられた土器である (Oguchi 1997: 198-199)。アッシュールの錫交易に関わる上記二つのフェーズは、ハブル土器が出現し流行を開始して、その主な「流行域」を形成するまでの時期 (前1900-1814年) とその流行が開花しその地方で一般的な土器となる、この土器の最盛期 (前1813-1700年) のなかに年代上、入る。前者を仮に「ハブル土器 第 1 期」とし、後者を「ハブル土器 第 2 期」と呼ぶことにしよう¹⁶⁾。

ハブル土器第 1 期については、この時期に関わる確かな考古学的証拠を提供する遺跡として、北イラクにあるテル・アル・リマー、テル・タヤ (Tell Taya) とテル・ジガーン (Tell Jigan) が挙げられる (Oguchi 1997: 202, 1998: 119 n.3)。これらは、年代がわかる粘土板文書を出土する層を含む遺跡の層位関係や土器自体の特徴において、シャムシ・アグド 1世以前のものであると判断できる、ハブル土器出土層をもつ遺跡である。さらに、証拠は断片的で十分ではないが、これに加えられる可能性がある遺跡としては、同じく北イラクのテル・ビッラ (Tell Billa)、シリア上部ハブル地域のテル・モザン (Tell Mozan) とシャガル・バザール (Chagar Bazar)、さらには、北西イランのウルミア湖の南西にあるディンカ・テペが挙げられる (Oguchi 1998: 119 n.3)。この時期はハブル土器の起源 (Oguchi 2001) を考える上でも、重視されるべき時期である。

ハブル土器第 2 期に至ると、この時期に割り当てることができる、ハブル土器出土層をもつ遺跡の数は急増する (Oguchi 1997: 212-213)。そして、主要分布域を形成す

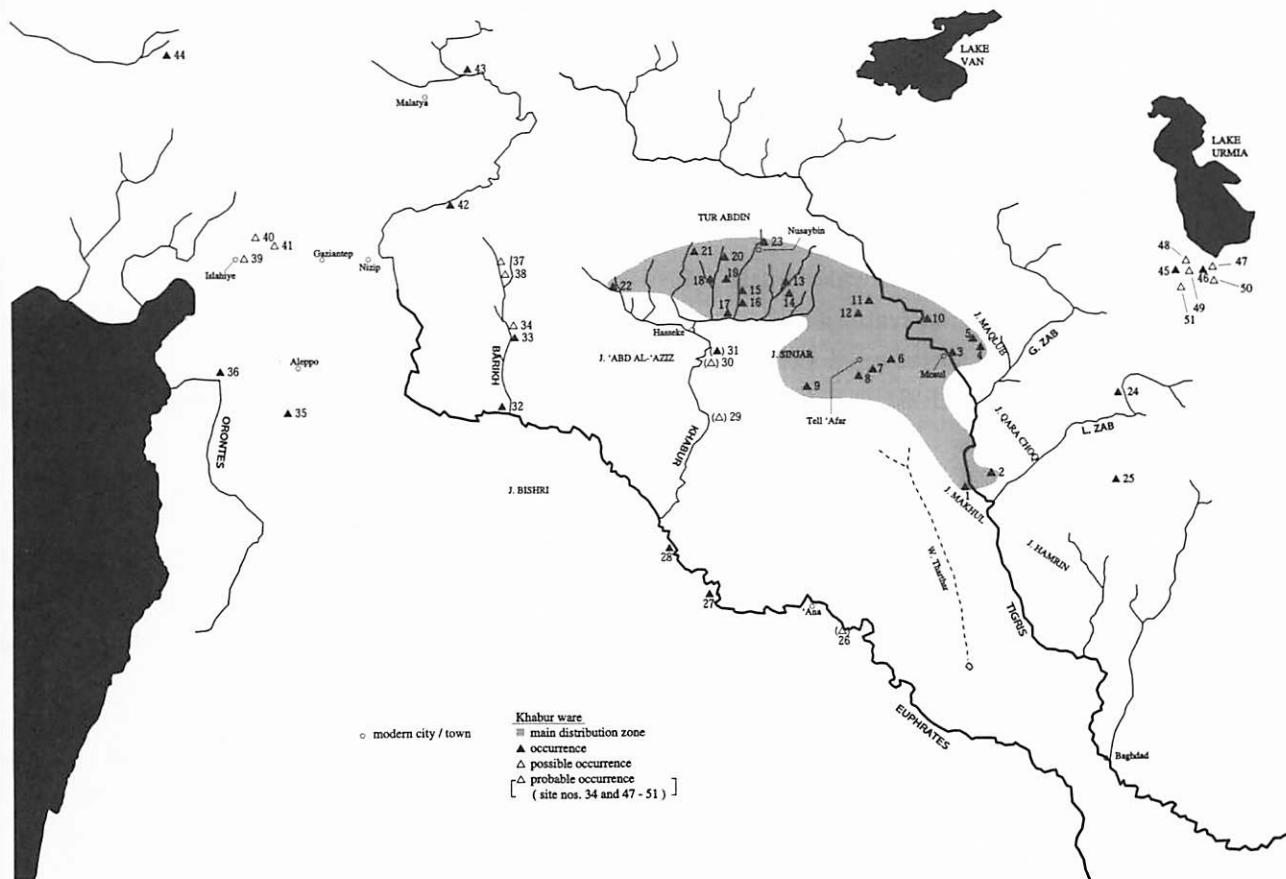


図3 ハブル土器の分布（前1813-1700年）

[主要分布域内の主要遺跡]

1. Aššur (modern Qalat Shergat)
2. Tell Aqrah
3. Nineveh (ancient Ninuwa)
4. Tell Billa (ancient Šibaniqa)
5. Tepe Gawra
 - * Tell Abu Maria (? ancient Apqum)
6. Telul eth-Thalathat
7. Tell Taya (? ancient Samiatum)
8. Tell al-Rimah (ancient Karana/Qaṭara ?)
9. Tell Khoshi
10. Tell Jigan
11. Tell Hamad Agha as-Saghir
12. Tell al-Hawa
13. Tell Leilan (ancient Šubat-Enlil/Šehna)
14. Tell Mohammed Diyab
15. Tell al-Hamidiya (? ancient Tai'du)
16. Tell Barri (ancient Kaḥat)
17. Tell Brak (? ancient Nagar/Nawar)
18. Chagar Bazar (? ancient Ašnakkum)
19. Tell 'Arbit
20. Tell Mozan (ancient Urkiš)
21. Tell 'Ailn
22. Tell Fakhariyah
23. Girnavaz Höyük (? ancient Nawar/Nwala/Nabula)

[主要分布域外の遺跡]

24. Tell Basmusian
25. Nuzi/Gasur (modern Yorgan Tepe)
26. 'Usiyeh
27. Mari (modern Tell Hariri)
28. Terqa (modern Tell 'Ashara)
29. Tell Fadghami (? ancient Qattunan)
30. Tell Ta'ban (ancient Tabatum)
31. Tell Bdeiri
32. Tell Bi'a (ancient Tuttul)
33. Tell Hammam et-Turkman (? ancient Zalpa)
34. Tell Sahlan (ancient Şahlala)
35. Ebla(modern Tell Mardikh)
36. Alalah (modern Tell Atchana)
37. Sultantepe
38. Aşağı Yarimaca
 - * A site ariund Nizip
39. Tilmen Hüyük
40. Gedikli Hüyük
41. Coba Hüyük (Sakce Gözü)
42. Lidar Höyük
43. İmikuşağı
44. Kültepe (ancient Kaniš)
45. Dinkha Tepe
46. Hasanlu
47. Pisdeli Tepe
48. Tepe Gondavelah
49. Kulera Tepe
50. Mohammd Shah Tepe
51. Gird-i-Khusrau

るのである(図3)(Oguchi 1997: 206)。この主要分布域とは、彩文土器であるハブル土器の使用が大半を占め、無彩文土器であっても、彩文土器と器形を同じくするものが使われた地域である。要するに、物を通じての表現を同じくする人々が住んでいた場所なのである。とはいっても、言語学上識別される民族が雑居していた場所でもある(Oguchi 1999: 89 n.26)。アッシュールを南限、テル・ビッラを東限、ギルナワズ・ホユク(Girnavaz Höyük)を北限、そしてテル・ファハリエ(Tell Fakhariyah)を西限とする、北イラクとシリアの上部ハブル地域の主要部分からなるこの分布域は、この時期、同種の土器を共有する「物質文化圏」を形づくっていたといつてもできる。この物質文化圏形成の萌芽は前3千年紀前半のニネヴェ5期にあったようであるが、それは別問題として、ハブル土器は、この第2期を通じて、当地域の政治的変動にかかわりなく、主要分布域のなかで連続と使われ続けられる。そしてさらに、第2期以降もその使用は続くのである。

さて、この時期において興味深い問題は、ハブル土器が主要分布域を越えて発見されるという事実である(図4)。それは、たとえ異なったケースであったとしても、ウルク土器の分布を想起させるものがある。ハブル土器の場合、主要分布域外のハブル土器出土遺跡の分布は所謂「線状分布」もしくは「飛び地分布」を示す。これに対して、主要分布域ではその土器出土遺跡の「面状・密集分布」を示すということができよう。しかも、主要分布域外の遺跡では、出土するハブル土器の数は僅かであるか、あるいは多数であるとしても、主要分布域内の出土率には匹敵せず、アセンブリッジを構成する大部分の土器がハブル土器の主要分布域のものとは全く異なるものである。「物質文化」という観点からしても、それらの遺跡は異なった文化圏に属するものなのである。従って、ハブル土器の副次的な分布を示す遺跡群であるといつてもできよう。次に列記する遺跡が、表採土器片によって認知される遺跡も含めた該当遺跡である(以下、各遺跡の関係報告についてはOguchi 1997: 214-216を見よ)。

- (a) イラク、キルクーク(古代名アラブハArrapha)の南西13キロの地点に位置するヨルガン・テペ(Yorgan Tepe) すなわちヌジ(Nuzi)の遺跡。
- (b) イラク、小ザブ川の上流のラニア盆地にあるテル・シェムシャラ(Tell Shemshara、古代名シュシャラŠušarra)の南5キロの地点に位置するテル・バスムシアン(Tell Basmusian)。
- (c) イラン、ウルミア湖南西のウシュヌ・ソルドス盆地にあるディンカ・テペ、ハサンル、ピスデリ・テペ(Pisdeli Tepe)、テペ・ゴンダヴェラー(Tepe Gondavelah)、クレラ・テペ(Kulera Tepe)、モハメッド・シャフ・テペ

(Mohammad Shah Tepe)、ギルド・イ・フラウ(Gird-i-Khusrau)などの遺跡群。

- (d) 中部ユーフラテス川流域のマリ(遺跡現代名テル・ハリリ Tell Hariri)とテルカ(Terqa、遺跡現代名テル・アシャラ Tell 'Ashara)、そしてオウシーヤ('Usiyeh)遺跡。
 - (e) シリア、ハブル川下流域のテル・ファドガミ(Tell Fadghami、古代の町カトゥナンQattunanか?)やテル・タバン(Tell Ta'ban、古代名タバトゥムTabatum)、テル・ブデイリ(Tell Bdeiri)など。
 - (f) シリア、バリーフ川とユーフラテス川との合流地点付近にあるテル・ビア(Tell Bi'a、古代名トウトゥルTuttul)。
 - (g) 同じくバリーフ川中流域のテル・ハンマム・エト・トルクマン(Tell Hammam et-Turkman、古代都市ザルパカ?)とテル・サフラン(Tell Sahlan、古代の町サフララŠahlalaか?)の二遺跡、そしてその上流域のスルタンテペ(Sultantepe)及びアシャウ・ヤリマジャ(Aşağı Yarimaca)の二遺跡。
 - (h) シリア、アレッポ(古代名ハラブHalab、ヤムハド王国の首都)の南西50キロの地点に位置するエブラ(Ebla、遺跡現代名テル・マルディフTell Mardikh)。
 - (i) トルコ、アムク平原にあるアララフ(Alalah、遺跡現代名テル・アッチャナTell Atchana)。
 - (j) トルコのイスラヒエ地方からガジアンテプ地方にかけて散在する遺跡で、ニジブ近郊のとある遺跡や、ティルメン・フユク(Tilmen Hüyük)、ゲディクリ・フユク(Gedikli Hüyük)、サクジェ・ギョズュ村の北西3キロの地点にあるジョバ・フユク(Coba Hüyük)など。
 - (k) トルコ、ユーフラテス川上流域のリダル・ホユク遺跡(Lidar Hüyük)とイミクシャウ(İmikuşağı)の二つの
 - (l) トルコ、中央アナトリアのキュルテペスナワチカニシュの遺跡。
- 以上の遺跡のなかには、単に帶線状の彩文がある土器片だけの出土をみるか、あるいはそのような土器片が採集されているかのどちらかで、正真正銘のハブル土器かどうか疑わしい場合があるが、可能性があるものとして載せておいた(各遺跡の証拠の査定についてはOguchi 1998: 120-129を見よ)。また、注意しなければならないことは、ハブル土器第2期は前1813年から前1700年かけての年代幅をもち、アッシュールによる錫交易の第2番目のフェーズは前1813年から前1750/40年の間に年代付けられるという点である。従って、主要分布域外で発見されるハブル土器あるいはその出土層が、錫交易が行われていた時期のものか、あるいは前18世紀後半に相当するものなのかを判断する必要が生じてくる。残念ながら、主要分布区域内におけるハブル土器第2期の、ハブル土器を出土する各遺

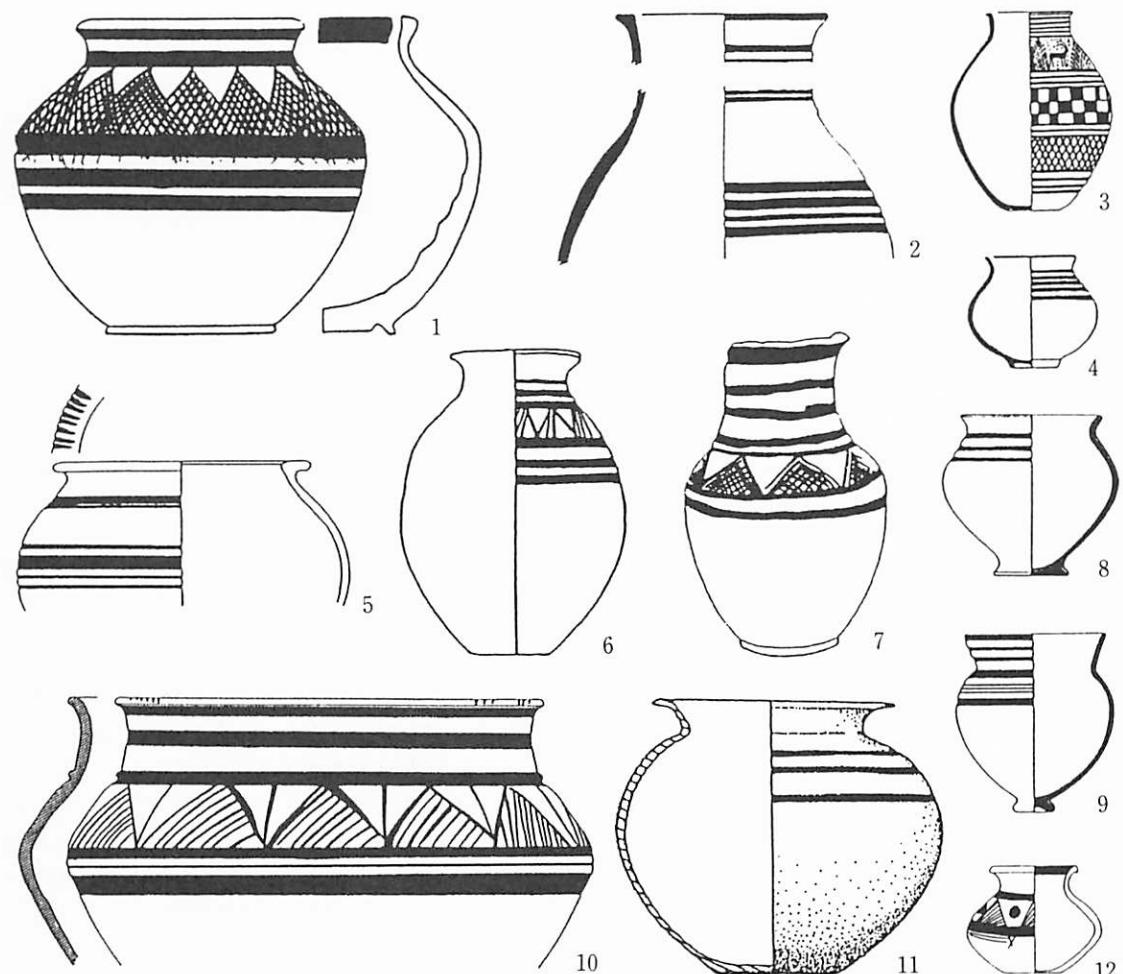


図4 主要分布域外遺跡出土のハプール土器（縮尺1/5、6のみ1/8、1は不明）

1. Tell Basmusian [Abu al-Soof 1970: Pl. XXIX: 12]
2. Dinkha Tepe [Hamlin 1974: Fig. 12:c]
3. Dinkha Tepe [Hamlin 1974: Fig. 12:b]
4. Dinkha Tepe [Hamlin 1974: Fig. I:2]
5. Alalah [Heinz 1992: Taf. 22:37]
6. Mari [Parrot 1959: Fig. 92:c]
7. Nuzi [Stein 1984: Pl. V:12 (= Starr 1937: Pl. 70B)]
8. Kültepe [Hrouda 1989: Fig. 2 (= T. Özgüç 1953: Abb. 26)]
9. Kültepe [Hrouda 1989: Fig. 2 (= T. Özgüç 1953: Abb. 25)]
10. Lidar Höyük [Kaschau 1999: Taf. 162:7]
11. İmikuşağı [Sevin 1987: Res. 22:e]
12. Tell Bi'a [Einwag 1998: Abb. 51:8]

跡の層位間の時間差が明らかではなく、主要分布域内では、編年という点で未だスローピング・ホライズン (sloping horizon) が確立できる段階にまで至っていないのが現状で、ましてや、その分布域外の諸遺跡との間となると、時間差の看取はほとんど不可能に近い。言い換えれば、ハブル土器第2期の範囲内における、各遺跡の当該土器出土層の年代的位置を探る手立ては、現状においてはないといわざるを得ない。ただし、文献学的な証拠から年代が判明する場合がある。上記の遺跡で言えば、キュルテペ以外にはマリとテルカ、テル・ビアがそれに相当し、いずれも、シャムシ・アダド1世の治世もしくはバビロンのハンムラビの治世に年代付け可能な証拠を提供するに至っている (Oguchi 1997: 200, 204-205)。他の遺跡については、各遺跡の層位と歴史的状況を考慮した上で、憶測をめぐらす以外に現在、道はない。

錫交易と土器の分布との関連性¹⁷⁾

歴史的状況を考慮すると、主要分布域外の遺跡でのハブル土器の出現は、すべてではないが、シャムシ・アダド1世の政治や経済、軍事的な諸活動と関連づけて説明できそうである (Oguchi 1997: 208-211)。政治、経済、軍事は共に複雑に絡み合って事が進んでいくわけで明確な区分はできないものの、敢えて分けてみると、それらの遺跡でのハブル土器出現の要因は次のように大別して考えることができる。そして、錫交易は言うまでもなく、経済の領域に入るものである。

頁数の関係もあって、シャムシ・アダド1世については周知の事柄として省略し、以下要点のみを記す。ただ、念頭に置いておかねばならないことは、ハブル土器の主要分布域が、シャムシ・アダド1世の王国の領域のなかで中核をなす部分であるということである。

1. 軍事遠征との関連及び政治的な側面からの考慮

まず、ヌジの場合がその筆頭に挙げられよう。ヌジでは、ハブル土器第2期に併行する時期において、井戸の中からハブル土器が1点出土しているのみである¹⁸⁾。しかも、それは保存容器として機能する壺である。この点と出土量ということを考慮すると、ヌジでのハブル土器の出現の要因は、少なくとも三つ考えられる。

(i) シャムシ・アダド1世が王国の領土を拡大する過程でアラブハ地方に遠征を行ったことは歴史上よく知られるが、この軍事遠征を通じてハブル土器がもたらされた可能性が一つ考えられる。つまり、軍用の食料として、特に流動物を運搬した容器が偶然、その場所に残されたという可能性である。

(ii) シャムシ・アダド1世は領土を幾つかの行政管区に分け、そこに長官を派遣して政治を行ったのであるが、征

服後のアラブハ地方にも当然、長官が派遣されていたはずであるし、中央政府と地方官府との連絡も頻繁に行われていたであろうから、ハブル土器がこの地にもたらされる機会はそこにもあったといえる。

(iii) 当時は権力者どおしの間の贈り物の交換ということは、関係を維持するために不可欠なものであったので、アラブハ地方の有力者に対する贈り物を入れる容器として使われた可能性もある。それは、外交手段であるとともに、領域維持のための政治的手段でもあったであろう。軍事遠征ということを考慮すると、バリーフ川上流域でも、ヌジと同じような説明が可能となる。シャムシ・アダド1世は晩年、ザルマクム (Zalmaqum) 地方への遠征として知られるバリーフ川上流域への軍事行動を起しているのである。一方、バリーフ川中流域はシャムシ・アダド1世の王国の領域に属し、敵国つまりヤムハド王国と対峙する場所でもある。従って、中央との連絡はかなり密であったはずで、この点からの説明も可能である。バリーフ川沿いの遺跡からのハブル土器の出土も僅かであるが、因みに、テル・ハンマム・エト・トゥルクマンではハブル土器の破片が数点出土しているだけに過ぎない。

バリーフ川の下流に目を転じると、バリーフ川がユーフラテス川に合流する地点付近にあるテル・ビアでも、量的には多くないが、ハブル土器が出土している。そこでは、さらにシャムシ・アダド1世のリンムに年代付けられる行政文書も出土しているのである。アッカド王サルゴンがトウトゥルでセム系の神ダガーンを崇拜していたことがよく知られるが、テル・ビアは正にその町トウトゥルに当たり、マリ文書によれば、シャムシ・アダド1世に仕えるヤシュブ・エルという名の長官がそこに派遣されていたという。明らかに、シャムシ・アダド1世の支配下にあった町であり、この遺跡でのハブル土器の出土は、逆に、シャムシ・アダド王国の首都のある上部ハブル地域とこの町の関係を裏付ける考古学的証拠となる。

さらに西に目を向けて、エブラとアララフでのハブル土器出土の理由は・・・と言いたいところではあるが、この両遺跡の場合には異なった解釈が必要である。なぜならば、バリーフ川の西にはハラブを首都とする大国ヤムハドがあり、テル・ビアを越えてシャムシ・アダド1世の王国の領土が拡大されることはなかったからである。しかし、その町は地中海方面へ勢力を伸ばす拠点になることは、地理的位置から見て疑いない。とすれば、エブラとアララフについてはどうのような説明ができるのか、それは後述する。

2. 交易との関連及び経済的側面からの考慮

ここで、まず初めに考慮しなければならないことは、交易路の確保ということも、シャムシ・アダド1世にとって

重要なことであったにちがいないと想定できることである。交易から得られる利益は軍事遠征の費用や王国の領域の維持のための資金にまわすことができるからである。この意味では、アッシュールとマリという二つの交易都市を逸早く掌中に収めたシャムシ・アダド1世の能力には目を見張るものがある。また、そこで忘れてはならないことは、交易路の確保自体が軍事行動と結びつくこともあるということだ。

交易路という観点からすれば、東ではやはりイラン北西部のウシュヌ・ソルドス盆地とイラクのラニア盆地が、アフガニスタンが錫の産地であることから、必然的に考慮されるべき場所となる。一方、西では、カニシュ方向へと向かうという点において、バリーフ川上流域が、まず経由地として考慮されるべき場所となろう。これらのことを見頭に置き、ハブル土器の分布を見た場合、この交易の中心地アッシュールのあるハブル土器の主要分布域を中心として、それらの当該遺跡が所謂「線状分布」を示すことが看取できる。それは西の場合がより明確で、バリーフ川上流域からは、一方はトルコのガジアンテプ地方からイスラヒエ地方へと向かいキルテペ方向を指し、他方はトルコのユーフラテス川上流沿いにキルテペなどカニシュ方向を目指す線状分布となる。ウシュヌ・ソルドス盆地とラニア盆地は、大ザブ川や小ザブ川に沿う線で容易に主要分布域と結びつけることが可能だ。そして、錫交易の主要ルートが通っていたと仮定すれば、それらの遺跡でのハブル土器の出現が無理なく説明できることになる。錫の交易路が通る場所であれば、アッシュールの、いわば商人たちの往来は頻繁であったであろうから、ハブル土器がもたらされる機会も多くなるはずなのである。

バリーフ川上流域の場合には、そこでのハブル土器の出現が、軍事遠征ということでも説明できることを前述したが、そこは錫交易路の存在という点からの説明も可能な場所もある。ここでの見方からすれば、さらにバリーフ川中流域にカールムをもつ都市ザルバがあったことを思い出すべきであろう。そのことを考慮すれば、テル・ハンマム・エト・トゥルクマンがあるバリーフ川中流域の場合でも、交易路が通過する場所であるという点からの、ハブル土器出現の説明が可能となる。バリーフ川上・中流域には、ともかく、ハブル土器がもたらされる様々な機会があったといえる。

また見方を変えると、バリーフ川上流域においては、ヤムハドとの抗争のなかで、交易路の確保ということが問題になって、軍事行動にまで発展した可能性も否定できない。交易路の確保という点では、アラブハ地方の場合も同じである。その横を流れる小ザブ川の上流のラニア盆地には、テル・シャムシャラ出土文書によれば、シャムシ・アダド

の王国に必要に応じて錫を供給するために設けられた倉庫がシュシャラの町にあったという。アラブハ地方への軍事遠征に引き続き、小ザブ川と大ザブ川の間の地域カブラ (Qabra) で、シャムシ・アダド1世は軍事行動を起すのだが、そこでは、この王は領土の拡大ということ以外に、交易路の確保ということも意図していた可能性がある。いずれにせよ、その文書は当時、錫の交易路がこの地を通過していたことを示唆するものであることは疑いない。

しかし、ラニア盆地では、ハブル土器の出土地という点で一つの解釈上の問題が生じる。ここで論理を展開すると、テル・シャムシャラすなわちシュシャラでも、ハブル土器が出現しても然るべきであるのだが、実はその発掘からは、ハブル土器は出土していない。だが、その近くの遺跡テル・バスムシアンではその出土をみる。テル・バスムシアンは錫交易に従事するアッシュールの人々の居留地となっていたのか、もしくは、そこには彼らの居留区があったのか。一方、テル・シャムシャラには、その地を統轄する支配者の行政府だけがあったのか。現状では、それを証左するだけの証拠はない。シュシャラには、シャムシ・アダド1世や、その息子でエカラトゥムの副王の任を果たしていたイシュメ・ダガルに服従する、クワリという名の地方的支配者が居たことだけは確かである。

では、ディンカ・テペのあるウシュヌ・ソルドス盆地はどうであったのか。ドイツ人によるこの地の踏査のデータや、オーレル・スタイン (Aurel Stein) のこの地での試掘からの資料を再検討したS.クロール (Kroll) は、ディンカ・テペやハサンル以外にまだ、ハブル土器を出土する遺跡があることを突き止め、ハブル土器の分布という点で、新たな情報を提供してくれているが (Kroll 1994: 164-165)、それらの遺跡を追加して分布を見ると、この地では小さな範囲で「面状・密集分布」を示すことがわかる。この地にカールムやワバルトゥムと呼ばれるものがあったかどうかは不明であるが、その分布形態は主要分布域との密接な関係を示すもので、錫交易に携わる人々の拠点があったという想定をより蓋然性の高いものにしている。ここで、さらに考慮すべき点は、ディンカ・テペにおけるハブル土器の出土量であろう。この遺跡はハブル土器を出土する複数の層をもつが¹⁹⁾、発掘で出土した土器片の13パーセントがハブル土器のものであり (Hamlin 1974: 126 n.6)、その出土量は比較的多い。量的な点、さらには日用品として使われたという点から見ても、この遺跡出土のハブル土器は「搬入品」というよりも、そこで製作されたものであると考えざるを得ない。このことは、ハブル土器の主要分布域から来た人々が居住していた可能性を強める証拠として捉えることができよう。

ただし、これと対照的なのが、文献上でカールムがあっ

たことがはっきりしているキュルテペすなわちカニシュである。この遺跡では、カールム Ib 層の墓からのみハブル土器が出土し、それらは小型のもので、総数は数点に過ぎない。カニシュで暮らすアッシュールからの人々は、文字、宗教、法律などの点においてはアッシュールの慣習を維持していたが、アナトリアでのやり方で建物を建て、土器を含む日常の生活用具も一般的にアナトリアで使われるものを用い生活していたことが、出土文書と発掘によって明らかとなっている。従って、この遺跡のハブル土器が墓からのみの出土で小型であるということを考慮すると、「搬入品」と見做すのが妥当である。

このようなキュルテペでのハブル土器の出土は、確かに錫交易との関係で説明できるものである。ただ、キュルテペよりも北西イランのウシュヌ・ソルドス盆地の方がハブル土器の主要分布域に近いという点で、「搬入品」かそこで製作されたものかというような判断を可能にする、ハブル土器の出土量での両遺跡間の差異は説明できよう。

出土量という点でもう一つ問題になる遺跡がある。それは、トルコのユーフラテス川上流域の遺跡イミクシャウである。そこではハブル土器とその「模造品」が比較的多く発見されている。それはまた解釈を要する事柄である。

さて、ここでエブラとアララフについて言及する必要があろう。エブラではマルディフ IIIB 層 (MB II) から、それ程多くはないがハブル土器が出土、アララフでは第VIII層からも僅かであるが出土している²⁰⁾。アララフの第VIII層の年代ははっきりしないが、その上の第VII層が粘土板文書を出土する層で、その文書とボガズキヨイ文書に記された出来事から第VII層は前1720年と前1650/20年の間に置かれ、それが第VIII層の年代を推定する上での考慮点となる。ともかく、ハブル土器の出土は、両遺跡の層をシャムシ・アダド1世の治世に年代付けたい気持ちにさせるのだが、ここで敢えてそう仮定すると、以下のような興味深い推論に達することができる。VII層の文書はこの層の時期にアララフがヤムハド王国の支配下にあったことを示す。その前の第VIII層の時期にもその支配下にあったであろうことは当然推測される事柄である。同じ頃、エブラもヤムハドの政治的影響を相当受けていることであろう。ヤムハドはシャムシ・アダドが凌駕できなかった、彼の宿敵である。では、なぜシャムシ・アダド1世の支配領域のなかにあるハブル土器の主要分布域からかなり離れ、ヤムハドの首都ハラブに近いこれらの二遺跡で、ハブル土器が出現するのだろうか。ここで注目されることは、アッシュール出土の石板文書に、シャムシ・アダド1世が、エブラ方面のとある国の王から貢ぎ物を受け取ったこと、片や、レバノンに達してそこに記念碑を建てたという記載である。記念碑についての真偽は別として、どうもシャムシ・アダド1世は地

中海方面へ進出を図ろうとしていた意図がそれより窺われるるのである²¹⁾。アッカド王が資源を求めアヌスやタウルス山脈へ遠征を行ったことや、シャムシ・アダドと攻防を繰り返したマリ王ヤフドゥン・リムが同じように東地中海方面への遠征を行ったことは文献上よく知られているが、シャムシ・アダド1世も同じことを企図したのだろうか。支配領域の外の幾つかの国々とシャムシ・アダド1世が同盟関係を結んでいたことも事実であるが、それはさておき、エブラとアララフでのハブル土器の出現は、もしこの王が西方への経済的拡張をめざしていたとさらに仮定するならば、彼の目的がヤムハドの本国自体を回避するかたちで、ある程度達成されたことを物語っているように思えるのである。

とはいってもエブラとアララフ出土のハブル土器が、シャムシ・アダド1世の治世と同時期ではなく、亡命と婚姻を通じてヤムハドとは友好関係にあった、マリ王ジムリ・リムの治世と同時期のものであったならば、当然、上記とは異なった説明が与えられなければならない。

3. その他

シャムシ・アダド1世の治世に年代付けられないハブル土器出土遺跡や、解釈上の問題を残す遺跡あるいは解釈を行う以前の未決問題がある遺跡を、ここで取り扱う。

シャムシ・アダド1世の治世に年代付けられないものとしては、マリの場合が好例である。マリでは宮殿からハブル土器が1点出土。それは壺である。この宮殿は前3千年紀からジムリ・リムの治世に至るまで使われ続けられたもので長い歴史を有するが、発掘を通じての出土遺物はバビロンのハンムラビによるマリの破壊（前1759年）によって残されたものである。そこに保管されていて発見された粘土板文書は、マリ王ヤフドゥン・リム、シャムシ・アダドの息子でマリを副王として支配したヤスマフ・アダド、後にマリの王位に復したジムリ・リムのそれぞれの時代のものがあったが、出土した土器すなわち壊れやすいものは、むしろハンムラビの破壊に近い時期のもの、すなわちジムリ・リムの時期のものであると考えられ、従ってハブル土器もシャムシ・アダド1世の死後のその王の治世に年代付けられる。それ故に、ハブル土器出土の理由も、シャムシ・アダド1世から切り離して考えなければならない。

マリ王ジムリ・リムは一時的ではあるが、東はテル・アル・リマー付近、南東はヒルベト・エド・ディニヤ (Khirbet ed-Diniyah、古代名ハラドゥム Haradum) 付近、北はハブル川下流域、西はバリーフ川流域まで制圧・支配していたことが知られ、その支配領域の一部はハブル土器の主要分布域とオーバーラップする。そして、マリ文書には、しばしば酒や油、蜂蜜などを運ぶ時、その容器である土器 (*karpatum*) の数による量の記載が見られるが、この遺跡

のハブル土器について考える時、注目される記載もある。マリ出土のものが壺であることも考慮すれば、そのハブル土器は運搬容器として使われた可能性があり、現時点で最も妥当な説明は、ジムリ・リムの治世中に主要分布域から何かを詰めて運び込まれたものであるとするものであろう。

ハブル土器について、マリの場合と同じような説明ができるのは、ハブル川下流域の遺跡である。ただ、そこで問題なのは、テル・ブデイリ以外の遺跡では、表採土器片によるのみの確認に過ぎないということだ。従って、ジムリ・リムの時のものであるのか、シャムシ・アダド1世の時のものであるのか、皆目検討がつかない。どちらの時期にせよ、マリとその主要分布域との交流は政治、経済的にも盛んであったはずなので、その出現に対する説明は上記と同じようになろう。ハブル川下流域では、ハブル土器を出土し且つ前18世紀だと確実に判断できる層をもつ遺跡の存在は、未だ報告されていない。この地域の前18世紀という時期は、マリ文書から復元される歴史的事項との関係において、今後の発掘調査で明らかにされねばならない点でもある。

例外はテル・ブデイリである。そこではハブル土器の破片が、発掘者が前14世紀だと判断する層から、3点のみ出土する。前14世紀ということは、主要分布域で設定されるハブル土器の下限年代をさらに下る年代である。しかし、破片であるということは、それらが遊離遺物である可能性を否定できるだけの出土状況をもつ資料ではないことを示す。従って、それらのハブル土器片が前14世紀に属するものだと確定することはできない。といっても、発掘された区域のなかでは、前2千年紀前半に相当する層の存在が確認されていないことも事実である。では、この遺跡出土のハブル土器はいつの時期のものか、それが問題である。未発掘部にハブル土器第2期併行期の層が確認されずにあり、そこからのものか、それとも、ハブル土器の最後の時期に相当するものと考えることができるのか、現状では的確な判断ができない²²⁾。発掘者の年代推定も問題となるところである。土器分布の解釈以前の問題がそこにはある。

最後に残った遺跡は、ヒルベト・エド・ディニヤの南東にある遺跡オウシーヤである。オウシーヤでは墓から小型のハブル土器が1点出土しているに過ぎない。マリと繋げば線状分布となるが、ある意味では「飛び地分布」と見做すことができ、解釈上での問題を残すハブル土器出土遺跡である。

4. 問題点

この項の最後に、二三の問題点についてふれておこう。

一つめは、キュルテペ・カールム Ib 層の時期に、アナト

リア内部では、キュルテペとイミクシャウを除く他の遺跡での、ハブル土器の出土や表面採集の報告例がないことである。キュルテペ・カールム Ib 層の時期にも、その下の第II層の時期と同じように、アナトリア内部では、カールムやワバントゥムをもつ幾つかの都市や町が、カニシュを中心にして交易網を形成したはずであるし、またアッシュールから来た人々がそれぞれの場所に居住していたはずである。従って、イラン北西部からキュルテペにかけて、アッシュールの人々の錫の交易活動に関連してハブル土器が副次的分布を示すのであるから、アナトリアの上記二つの遺跡以外の場所でも、ハブル土器が、たとえ僅かであっても発見されて然るべきだという論理が成り立つのであるが、アナトリア内部の他の遺跡で、たとえ表採品であったとしても、ハブル土器が未だ発見されていないという事実は、解釈上の問題を引き起こす。

二つめは、そのような論理に基づき、イラン北西部からアフガニスタンにかけて、もしアッシュールの人々の拠点がその路程にもあったと仮定するならば、上記と同じ論理に基づき、同じ解釈上の問題がそこにも生じてくるということである。

三つめは、特にシャムシ・アダド1世の王国の領域外で、この王との関連があったからといって、必ずしもその場所でハブル土器が出土するとは限らないということである。例えば、トルコのトゥズ湖の南東にある遺跡アジェムホユク (Acemhöyük) の宮殿址では、この王の名を刻んだ印章の押捺のある封泥が発見されているが (N. Özgür 1985: 64-65)、ハブル土器出土ということについての報告は皆無である。また、カトナはシャムシ・アダド1世の王国と同盟国で、彼の息子のヤスマフ・アダドはカトナ王イシュヒ・アダドの娘ベルトゥムを娶っていて、両国は密接な関係にあったわけだが、カトナからのハブル土器の出土もみられない。前者の場合は、シャムシ・アダドがその支配者へ贈り物を送っていた証拠であり、後者の場合でも、当然、贈り物の交換ということが想定できる。いずれも、外交という領域に属するものであり、その点が考慮点となるのか、とはいえた解釈上の問題がここにも残る。

北メソポタミアとアナトリアの間の錫の交易路

交易路を考える場合には、頻繁に使われたルートであるという前提に立ち、議論されなければならない (Oguchi 1999: 98ff.)。というのは、いつの時代でも、大小様々なルートが入り組んで存在していたはずで、当然、その点に加え地勢ということを考慮すれば、無数のルートの想定が常に可能だからである。

1. 錫交易第1フェーズ（前1900-1814年）（図5）

この時期はハブル土器が主要分布域を形成する過程に

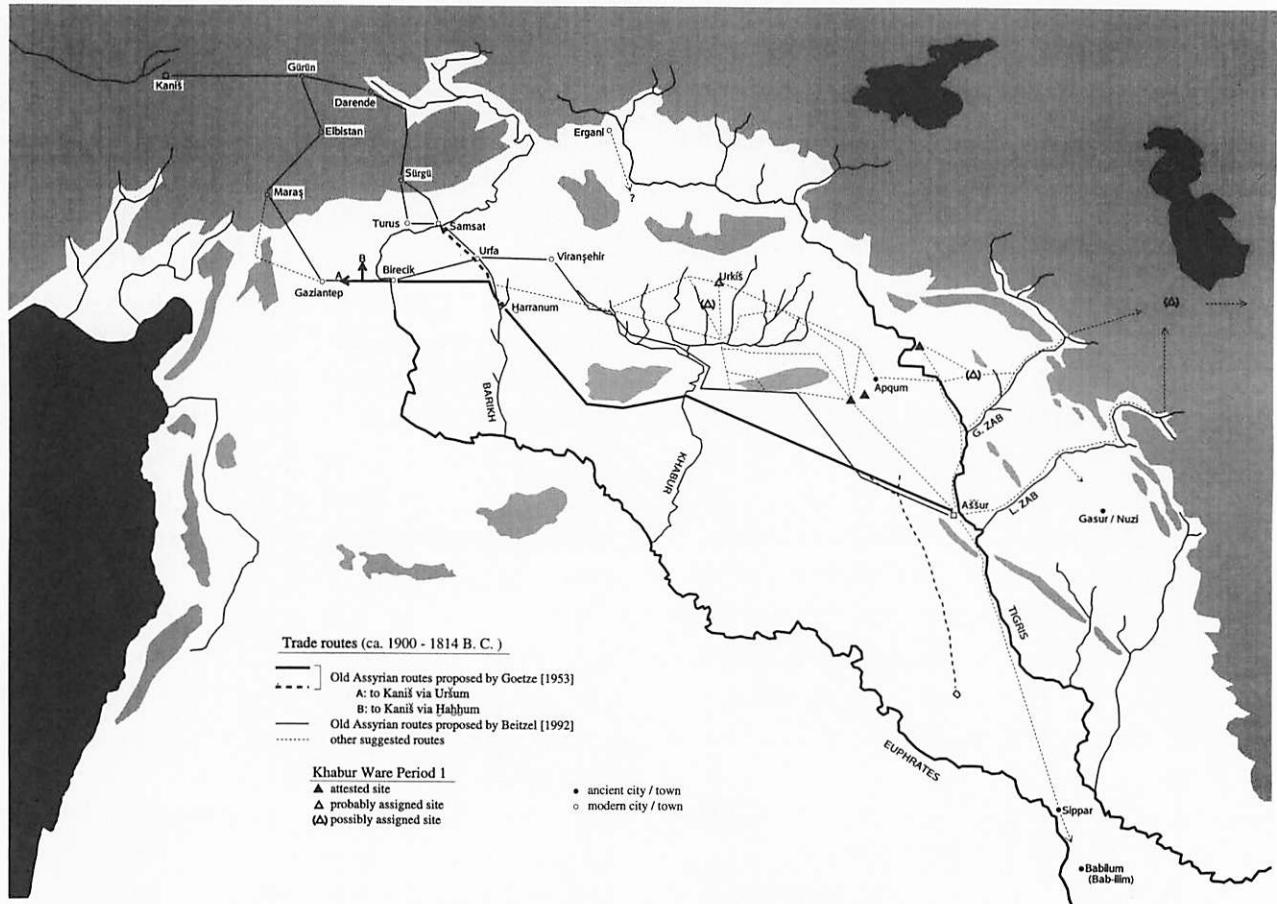


図5 交易路 その1 (前1900-1814年)

ある時期で、一遺跡での可能性を除いて、分布域外でのハブル土器の出現は見られない。ハブル土器第1期の後半にハブル土器が出現した可能性がある遺跡はディンカ・テペのみである (Oguchi 1998: 120 n.3)。それは単なる可能性ではあるが、それはまた錫の主要交易路がこの地を通っていた可能性をも示唆するものである。アッシャーの東側でもう一つ考えられるルートが、小ザブ川の上流ラニア盆地を経由するものである。そこにはウル第3王朝時代にはシャシュルム (Šašrum)、後にシュシャラと呼ばれる町があった。このルートはザグロス山脈中の二三のルートを通ってディンカ・テペ方面と繋がるルートでもある。このルートが使われた可能性もあるが、大ザブ川沿いにディンカ・テペ方面に抜けるルートの方が、山岳地帯を通過する距離が短いので、当時トゥルクー、ルルー、グティ、エラムなどとして知られるザグロスの山岳系民族の脅威をある程度避けることができるルートとして、より頻繁に使われたであろうと推測される。

なお、錫の交易路については、キュルテペ文書に依拠して推定を行った復元があるが、それはむしろ北メソポタミアの天水農耕地帯の南限沿いに主要ルートが走っていたとするものである (Goetze 1953: 64ff.)。経由する都市や町

で、時として法外な通行税を払うよりも、遊牧に支払って隊商路の安全を確保したほうが得であるという考え方も成立するであろう (Oates 1968b: 36-37)。しかし、移動が遅いロバによって編成された隊商には、やはりロバのための十分な水と秣が必要とされることは当然のことで、そのことを考慮すると、主要ルートはこの時期、北イラクや上部ハブル地域の天水農耕地帯を横切っていたと考えるのが妥当であるように思われる。

このフェーズの主要交易路については、以上のように想像の域を出ないのが現状である。従って、このフェーズでの交易路を考古学的側面から証左するためには、ハブル土器がまだ域外分布を示さない時期でもあり、この論考とは異なったアプローチが必要となる。往来が頻繁であればあるほど、人々の間の交流も盛んになるし、物自体もしくはアイデアというかたちでの交換も頻繁に行われるはずである。そのような現象がより具体的に表れたのが土器の主要分布域であろう。当然、錫交易の第1フェーズでも、錫交易に関連して人の動きがあるのだから、形成されつつあるハブル土器の主要分布域を越えた物の動きがあるはずだが、実は論を進めることができない問題は別のところにある。それは、北メソポタミアでは、考古学的な点に於

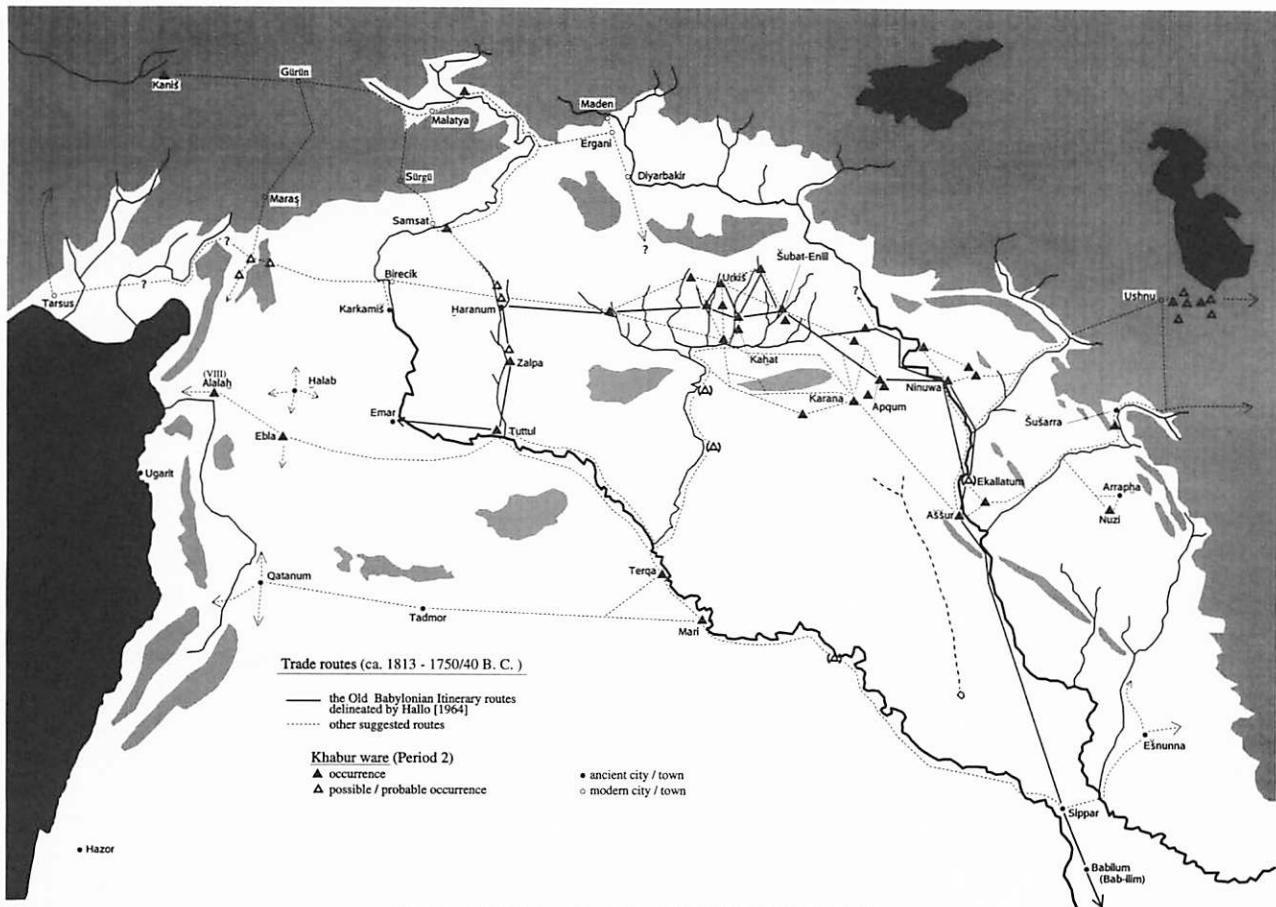


図6 交易路 その2（前1813-1750/40年）

いて、この時期のことがほとんど何も分かっていないということなのだ。この時期のものとして確認できる遺跡の数を見れば、そのことが理解できるであろう。

2. 錫交易第2フェーズ（前1813-1750/40年）（図6）

この時期の主要ルートを探るために最も有用な史料は、イリノイ大学とエール大学に保管されている三枚の粘土板文書から成る所謂「古バビロニア旅行記」である（Goetz 1953, 1964; Hallo 1964）。ラルサ（Larsa）のリム・シンの頃のもので、ラルサから北イラクと上部ハプール地域の天水農耕地帯を通過してバーリフ川上流域に達し、その川沿いに下りユーフラテス川に出てエマル（Emar）に至る、その間の往復路が記載されている。言うまでもなく、これは錫の交易路の推定に役立つ。そして、重要なことは、そのルートの一部がハプール土器の主要分布域を通過するものであるということだ。さらに、それに追加されるべきルートが、ハプール土器の分布から証左されるものとなる。東はディンカ・テペのあるウシュヌ・ソルドス盆地を通過するものと、シュシャラのあるラニア盆地を通過するもので、「錫の道」ということができよう。歴史的状況を考えると、シャムシ・アダド1世の時には、ラニア盆地を通過するルートがウシュヌ・ソルドス盆地のものに加え、かなり頻繁に

使われたものと思われる。当時、この地はシャムシ・アダドの王国へ錫を供給する拠点になっていたがゆえに、ラニア盆地からウシュヌ・ソルドス盆地を経由しないでアフガニスタンに至る交易路がその王の時、新たに開発された可能性もある。しかし、シャムシ・アダドの死後まもなく、山岳系民族の活発化によって、このルートを通じての錫の供給は途絶えたであろうことは、歴史的観点から見て推測に難くない。他方、北西に目を向ければ、ハプール土器の分布という点で裏付けられるガジアンテペ～イスラヒエ地方を経由してカニシュに向かって北上するルート、さらには明らかにユーフラテス川上流域に沿ってカニシュに至るルートが加えられる。こうして、古アッシリア時代の錫交易の第2フェーズの主要交易路の推定が成立する。

おわりに

以上のこととは、ハムリンの提言がかなりの蓋然性をもち、評価できるものであるを示している。しかし、一方では、ある特定の土器の分布を見た場合、時間差ということを考慮した上で、場所ごとに異なった解釈が要請されることが理解されたことであろう。なかには、複数の解釈が成立する場合もあり得る。事実、ハプール土器の場合、「錫交易」

に関連づけて論じることができるのはその分布の部分に過ぎないのである。

また、我々がこのような問題を熟考するとき、ある特定の土器が出現し広まり形づくられる「流行域」とはいったい何であったのか、という問題の考慮に立ち返ることが常である。ハブル土器でいえば、その主要分布域とは何を意味するものなのか、ということになる。政治史という点から見れば、ハブル土器第1期は大小様々な都市国家が乱立していた時期で、次の第2期は、ハブル土器の主要分布域がシャムシ・アダド1世の王国の領域に、その核ではあったが部分として組み入れられていた時期と、その王の死後、再び大小の都市国家に分裂した時期とに分かれる。しかし、ハブル土器の主要分布域は存続するのである。つまり、その「流行域」とは歴史的観点から見た場合、実際どのように捉えることができるのかという問題にそこで直面することになる。

さらに問題は波紋状的に広がっていく。前3千年紀の後半、刻文から櫛状刻文へと徐々に流行の変化をみた北メソポタミアで、前2千年紀に入り、なぜ彩文土器（ハブル土器）が再び出現したのか。なぜ、また、どうのようにして、その彩文土器は広まったのか。我々は今、「流行域」を具体的に意義づけるとともに、そのような疑問にも答える立場にいるのである。

古アッシリア時代の「錫交易」は、ともかく、ハブル土器の出現からその最盛期にかけて行われた、アッシュールの人々による商業活動であった。それは、シャムシ・アダド1世の死後の混乱期に至っても暫らくの間、続けられた活動であり、その活動が止んだ後も、北メソポタミアへの錫の流入は続いたのである²³⁾。

註

- 1) 本論考のアッカド語などの古代言語の固有名詞（地名、人名など）のカタカナ表記は、二重子音がある場合、国内で慣用されているもの（例えばAssur→アッシュール、Sippar→シッパルなど）以外のものについては、二つの子音の音の同化ということを前提として、敢えて促音（ツ）表記をしていない（例えばArrapha→アラブハ、Tuttul→トゥトゥルなど）。従って、カタカナ表記には統一性がないので注意。
- 2) このような方法に対する反論として、土器の巨視的解釈についての信憑性を問うD.パレール（Parayre）の思弁的論考があるが、注意を換気する（Parayre 1986）。
- 3) 同名の町がアナトリアのキュルテペ（カニシュ）の北方にもあるので注意。そのもう一つのザルバにはワバルトゥムが存在した。
- 4) 一方、バビロニア方面へもアッシュールの人々が出向していたことが知られる。それは、古代都市シッパル（Sippar、遺跡現代名テル・アブ・ハッバ Tell Abu Habba）の郊外にあるテル・エド・デール（Tell ed-Der）遺跡出土の粘土板文書やシッパル出土の粘土封筒から知られる事実である（Walker 1980；Collon 1993）。しかも、アッシュールのいわば商人たちの拠点がシッパルにあつたことを示唆するものであった（Walker 1980: 15-17）。バビロニアの織物を購入することを目的としていたのだろう。また、テル・エド・デールからの粘土板文書のなかには、アッシュールから銅が送られてきたことを示唆するものもあった（Leemans 1960: 101-102）。アッシュールの南メソポタミアにおける経済的活動ということは別にしても、南北両メソポタミア間の交流は当時も続いていたことは事実で、北メソポタミアの諸遺跡では、数は多くないが、南メソポタミア特有の器形をもつ土器が発見されることがそれを裏付けている。それがどのような交流であったかは、また一つの解釈上の問題となる。
- 5) ここで一つ疑問が生じる。というのは、確かにアッシュールの人々は錫交易に従事していたのだが、青銅をつくる時、錫よりも多くの量を必要とする銅についての、アナトリア外部への輸出あるいはアッシュールへの輸送に関する言及が、キュル・テペ文書には皆無であるからだ。キュル・テペ文書では、専らアナトリア内部での銅の取引についての言及が見られるだけなのである（Larsen 1976: 91；Veenhof 1972: 350）。M.T.ラルセン（Larsen）は、中央アナトリアから外れたトルコの銅の産地エルガニ地方から直接、銅がアッシュールにもたらされたのであろうと推測している（Larsen 1976: 91-91）。註4）で引合に出したように、銅もアッシュールの人々が取り扱った交易品であった可能性が高い。
- 6) この問題については、Laessøe 1959 と Landsberger 1965 を見よ。論議の要約は Moorey 1985: 124 か、あるいは同じく Moorey 1994: 295-296 で見ることができる。
- 7) 南メソポタミアからの史料では、アナクム（anākum）という言葉で表される（シュメール語では AN.NA）。
- 8) Oates 1965: 75 あるいは Moorey 1985: 124, 1994: 296 と比較せよ。
- 9) この論考では「中年代説」を採用している。
- 10) キュルテペからは、アッシュールのアッシュール神殿建造を記録するエリシュム1世の碑文が出土しているのである。
- 11) 一説では、カニシュの破壊は北のザルバ（註3）を見よ）によるものであるとされる（Orlin 1970: 244）。
- 12) バビロニアへ一時逃避していたシャムシ・アダド1世が再びアッシュール方面に向かい北上したという想定において、エカラトゥムはティグリス川と小ザブ川の合流点のやや南に位置するテル・エド・ダハブ（Tell ed-Dahab）だと見做されていたこともある。
- 13) 「アニタ文書」の邦訳は、紺谷1999: 133 (110) - 130 (113) に見ることができる。
- 14) 註11) を見よ。
- 15) アニタの出身地であるクシャラは、ヒッタイトの初期の王たちが居住していた場所でもある。しかし、ピトナとアニタの王朝とヒッタイトの王朝とは系統的には繋がらないという見方が一般的で、アニタが都としたカニシュ＝ネシャの破壊（第Ib層）はクシャラのヒッタイト王朝によるものではないかと考えられている（Orlin 1970: 246；Gurney 1973: 234, 238）。
- 16) さらに、ハブル土器は第3期（前1700-1550年）、第4期（前1550-1400年）と細分される時期を通じて継続して用いられる。それらについては、この論考の主題から外れるので、これ以上言及しない。
- 17) ここで予め断っておくが、この項では、ハブル土器という特定の土器の分布を対象にしているので、その分布範囲以外の地域については、必要のないかぎり論述することはない。
- 18) これ以外に、ヌジからはハブル土器の口縁部の破片が1点出土

- しているが、その遺跡の層序関係を考慮すると、それはハブル土器第2期の後のものだと考えられる。おそらく第3期に位置付けられるものであろう。
- 19) ディンカ・テペではハブル土器を出土する層は四つのフェーズに分けられている。後半のフェーズからは、ハブル土器の発展段階の後期に相当するタイプのハブル土器が出土しているので、ハブル土器第2期に併行する時期の層だけではなく、第3期併行期のハブル土器出土層がこの遺跡にはあることを、ここに付言しておく。
- 20) アララフではその上の第VI・V層からも、量は多くないが、ハブル土器が出土している。明らかにハブル土器発展段階の後半に位置付けられる文様スタイルをもつハブル土器も、そのなかに含まれている。しかし、第VII層ではハブル土器の出土はない。とにかく、この遺跡でも、主要分布域で決定されるハブル土器第2期という時期の後に、再度ハブル土器の出現を見るわけで、アララフはまたハブル土器第2期の後のその土器の副次的分布を示す遺跡でもあるといえる。
- 21) ヤムハドとの対立においてカトナ(Qatna/Qatanum、遺跡現代名テル・ミシュリフエ Tell Mishrifeh)と同盟関係を結ぶことになったシャムシ・アダド1世の軍隊が、ヤムハドとの抗争のなかで偶然レバノンにまで達することになったとする見解(Villard 1995: 881)と比較せよ。
- 22) ハブル土器の場合には、その発展段階を通じて、変化するもの(時期の指標)もあれば、継続して現れるタイプもあり、各時期の指標となる土器がともに出土しないかぎり、時期の判断が難しい。テル・ブディイで問題なのは、数が少ないということもあるて、この遺跡出土のハブル土器の破片には指標となるようなものが見当たらず、かといって、後期のタイプが欠損するという推断も下すことができないということだ。この遺跡の場合には、状況証拠から推し量る以外に手立てはないのである。
- 23) 例え、テル・アル・リマー出土の中古アッシリア時代の文書のなかには、ナイリ(Nairi)から錫がもたらされたという記載があるものがある(Oates 1967: 90-91; Wiseman 1968: 175, 183)。ナイリは、後にウラルトゥと呼ばれる場所で、ヴァン湖とウルミア湖の周辺地域のことである。これは、ディンカ・テペ方面に「錫の道」があったことを裏付けるばかりではなく、この時代にもまだ北メソポタミアへの錫の流入が続いていることを示すものである。

参考文献

- Abu al-Soof, B. 1970 Mounds in the Rania Plain and Excavations at Basmusian (1956). *Sumer* 26: 65-104.
- Balkan, K. 1955 *Observations on the Chronological Problems of Karum Kanış*. Türk Tarih Kurumu Yayınlarından VII, Seri -No.28. Ankara, Türk Tarih Kurumu Basımevi.
- Balkan, K. 1957 *Letter of King Anum-hirbi of Mama to King Warshama of Kanish*. Türk Tarih Kurumu Yayınlarından VII, Ser-No.31a. Ankara, Türk Tarih Kurumu Basımevi.
- Beitzel, B.J. 1992 The Old Assyrian Caravan Road in the Mari Royal Archives. In G.D. Young (ed.), *Mari in Retrospect: Fifty Years of Mari and Mari Studies*, 35-57. Winona Lake, Indiana, Eisenbrauns.
- Buchanan, B. 1969 The End of the Assyrian Colonies in Anatolia: The Evidence of the Seals. *Journal of the American Oriental Society* 89: 758-762.
- Collon, D. 1993 Another Old Assyrian Document from Sippar. In M. J. Mellink, E. Porada and T. Özgür (eds.), *Aspects of Art and Iconography: Anatolia and Its Neighbors. Studies in Honor of Nîmet Özgür*, 117-119. Ankara, Türk Tarih Kurumu Basımevi.
- Dalley, S. 1976 Chapter II: The Iltani Archive. In S. Dalley, C.B.F. Walker and J.D. Hawkins (eds.), *The Old Babylonian Tablets from Tell al Rimah*, 31-161. London, British School of Archaeology in Iraq.
- Dalley, S. 1984 *Mari and Karana. Two Old Babylonian Cities*. London, Longman.
- Eidem, J. 1987-88 Tell Leilan Tablets 1987: A Preliminary Report. *Annales Archéologiques Arabes Syriennes* 37-38: 110-127.
- Eidem, J. 1991 The Tell Leilan Archives 1987. *Revue d'assyriologie et d'archéologie orientale* 85: 109-135.
- Einwag, B. 1998 *Die Keramik aus dem Bereich des Palastes A in Tall Bi'a/Tutul und das Problem der frühen Mittleren Bronzezeit*. Münchener Universitäts-Schriften: Philosophische Fakultät 12. Münchener Vorderasiatische Studien, Band 19. München, Profil Verlag.
- Gerstenblith, P. 1983 *The Levant at the Beginning of the Middle Bronze Age*. American Schools of Oriental Research Dissertation Series, No.5. American Schools of Oriental Research.
- Goetze, A. 1953 An Old Babylonian Itinerary. *Journal of Cuneiform Studies* 7: 51-72.
- Goetze, A. 1964 Remarks on the Old Babylonian Itinerary. *Journal of Cuneiform Studies* 18: 114-119.
- Gurney, O.R. 1973 Chapter VI. Anatolia c.1750-1600 B.C. In I.E.S. Edwards, C.J. Gadd, N.G.L. Hammond and E. Sollberger (eds.), *The Cambridge Ancient History*, 3rd ed., Vol. II, Part 1, 228-255. Cambridge, Cambridge University Press.
- Hallo, W.W. 1964 The Road to Emar. *Journal of Cuneiform Studies* 18: 57-88.
- Hamlin, C. 1971 *The Habur Ware Ceramic Assemblage of Northern Mesopotamia: An Analysis of Its Distribution*. Ph.D. Dissertation, University of Pennsylvania. Ann Arbor, Michigan, University Microfilms International.
- Hamlin, C. 1974 The Early Second Millennium Ceramic Assemblage of Dinkah Tepe. *Iran* 12: 125-146.
- Heinz, M. 1992 *Tell Atchana/Alalakh. Die Schichten VII-XVII*. Alter Orient und Altes Testament, Band 41. Neukirchen-Vluyn, Verlag Butzon & Bercker Kevelaer/Neukirchener Verlag.
- Hrouda, B. 1989 Die Häbür-Ware in neuerer Sicht. In K. Emre, B. Hrouda, M. Mellink and N. Özgür (eds.), *Anatolia and the Ancient Near East. Studies in Honor of Tahsin Özgür*, 205-214. Ankara, Türk Tarih Kurumu Basımevi.
- Kaschau, G. 1999 *Lidar Höyük: die Keramik der Mittleren Bronzezeit*. Archaeologica Euphratica, Band 3. Mainz am Rhein, Verlag Philipp von Zabern.
- Kramer, C. (= Hamlin, C.) 1977 Pots and Peoples. In L.D. Levine and T.C. Young, Jr. (eds.), *Mountains and Lowlands: Essays in the Archaeology of Greater Mesopotamia*. Bibliotheca Mesopotamica, Vol. 7, 91-112. Malibu, Undena Publications.
- Kroll, S. 1994 Habur-Ware im Osten oder: der TAVO auf Irrewegen im Iranischen Hochland. In P. Calmeyer, K. Hecker, L. Jakob-Rost and C.B.F. Walker (eds.), *Beiträge zur Altorientalischen Archäologie und Altertumskunde. Festschrift für Barthel Hrouda zum 65. Geburtstage*, 156-166. Wiesbaden, Harrassowitz Verlag.

- Laessøe, J. 1959 Akkadian Annakum: "Tin" or "Lead"? *Acta Orientalia* 24: 83-94.
- Landsberger, B. 1965 Tin and Lead: The Adventures of Two Vocabularies. *Journal of Near Eastern Studies* 24: 285-296.
- Larsen, M.T. 1967 *Old Assyrian Caravan Procedures*. Publications of the Netherlands Historical and Archaeological Institute in Istanbul 22. Leiden, Netherlands Historical and Archaeological Institute in Istanbul.
- Larsen, M.T. 1974 *The Old Assyrian City-State and Its Colonies*. Mesopotamia, Vol. 4. Copenhagen, Akademisk Forlag.
- Leemans, W.F. 1960 *Foreign Trade in the Old Babylonian Period, as Revealed by Texts from Southern Mesopotamia*. Studia et Documenta, Vol. 6. Leiden, E.J. Brill.
- Mallowan, M.E.L. 1937 The Excavations at Tall Chagar Bazar and an Archaeological Survey of the Habur Region: Second Campaign. *Iraq* 4: 91-177.
- Moorey, P.R.S. 1985 *Materials and Manufacture in Ancient Mesopotamia: The Evidence of Archaeology and Art. Metals and Metalwork, Glazed Materials and Glass*. BAR International Series 237. Oxford, British Archaeological Reports.
- Moorey, P.R.S. 1994 *Ancient Mesopotamian Materials and Industries. The Archaeological Evidence*. Oxford, Clarendon Press.
- Oates, D. 1965 The Excavations at Tell al Rimah, 1964. *Iraq* 27: 62-80.
- Oates, D. 1967 The Excavations at Tell al Rimah, 1966. *Iraq* 29: 70-96.
- Oates, D. 1968a The Excavations at Tell al Rimah, 1967. *Iraq* 30: 115-138.
- Oates, D. 1968b *Studies in the Ancient History of Northern Iraq*. London, Oxford University Press.
- Oguchi, H. 1997 A Reassessment of the Distribution of Khabur Ware: An Approach from an Aspect of Its Main Phase. *Al-Rāfidān* 18: 195-224.
- Oguchi, H. 1998 Notes on Khabur Ware from Sites outside Its Main Distribution Zone. *Al-Rāfidān* 19: 119-133.
- Oguchi, H. 1999 Trade Routes in the Old Assyrian Period. *Al-Rāfidān* 20: 85-106.
- Oguchi, H. 2001 The Origins of Khabur Ware: A Tentative Note. *Al-Rāfidān* 22: 71-87.
- Oppenheim, A.L. and E. Reiner (eds.) 1961 *The Assyrian Dictionary of the Oriental Institute of the University of Chicago*, Vol.21 (Z). Chicago, Oriental Institute.
- Oppenheim, A.L., E. Reiner and R.D. Biggs (eds.) 1973 *The Assyrian Dictionary of the Oriental Institute of the University of Chicago*, Vol.9 (L). Chicago, Oriental Institute.
- Orlin, L.L. 1970 *Assyrian Colonies in Cappadocia*. Hague, Mouton.
- Özgürç, N. 1968 New Light on the Dating of the Levels of the Karum of Kanish and of Acemhöyük near Aksaray. *American Journal of Archaeology* 72: 318-320.
- Özgürç, N. 1980 Seal Impressions from the Palaces at Acemhöyük. In E. Porada (ed.), *Ancient Art in Seals. Essays by Pierre Amiet, Nîmet Özgürç, and John Boardman*, 61-86. Princeton, Princeton University Press.
- Özgürç, T. 1953 Vorläufiger Bericht über die Grabungen von 1950 in Kültepe Ausgeführt im Auftrage des Türk Tarih Kurumu. *Bulleten* 17: 109-118.
- Parayre, D. 1986 Des Hurrites et des pots: questions ouvertes à propos de la céramique du Habur et de la céramique bichrome. In M.-Th. Barrelet and J.-C. Gaedin (eds.), *A propos des interprétations archéologiques de la poterie: questions ouvertes*, 49-76. Paris, Editions Recherche sur les Civilisations.
- Parrot, A. 1959 *Le Palais*. Mission Archéologique de Mari, Vol. II. Institut Français d'Archéologie de Beyrouth. Bibliothèque archéologique et historique. Tome LXX. Paris, Librairie Orientaliste Paul Geuthner.
- Postgate, C., D. Oates and J. Oates 1997 *The Excavations at Tell al Rimah: The Pottery*. Iraq Archaeological Reports 4, British School of Archaeology in Iraq. Warminster, Aris and Phillips Ltd.
- Postgate, J.N. 1992 *Early Mesopotamian Society and Economy at the Dawn of History*. London and New York, Routledge.
- Sevin, V. 1987 İmikuşağı Kazıları, 1986. *Kazı Sonuçları Toplantısı* 9: 299-333.
- Starr, R.F.S. 1937 *Nuzi*. Vol. II. Cambridge, Massachusetts, Harvard University Press.
- Stech, T. and V.C. Pigott 1986 The Metals Trade in Southwest Asia in the Third Millennium B.C. *Iraq* 48: 39-64.
- Stein, D.L. 1984 Khabur Ware and Nuzi Ware: Their Origin, Relationship, and Significance. *Assur* 4/1: 1-65.
- Veenhof, K.R. 1972 *Aspects of Old Assyrian Trade and Its Terminology*. Studia et Documenta, Vol. 10. Leiden, E.J. Brill.
- Veenhof, K.R. 1985 Eponyms in the "Later Old Assyrian Period" and Mari Chronology. *Mari, Annales de Recherches Interdisciplinaires* 4: 191-218.
- Villard, P. 1995 Shamshi-Adad and Sons: The Rise and Fall of an Upper Mesopotamian Empire. In J. M. Sasson, J. Baines, G. Beckman and K.S. Rubinson (eds.), *Civilizations of the Ancient Near East*, Vol.II, 873-883. New York, Simon & Schuster Macmillan.
- Walker, C. 1980 Some Assyrians at Sippar in the Old Babylonian Period. *Anatolian Studies* 30: 15-22.
- Wiseman, D.J. 1968 The Tell al Rimah Tablets, 1966. *Iraq* 30: 175-205.
- Yener, K.A. and H. Özböl 1987 Tin in the Turkish Taurus Mountains: The Bolkadag Mining District. *Antiquity* 61: 220-226.
- Yener, K.A. and P.B. Vandiver 1993 Tin Processing at Göltepe, an Early Bronze Age Site in Anatolia. *American Journal of Archaeology* 97: 207-238.
- 紺谷亮一 1999 「ヒッタイト帝国成立の背景」『歴史人類』27号 148 (95) -118 (125) 頁。

小口裕通
國立館大学 イラク古代文化研究所
Hiromichi OGUCHI
The Institute for Cultural Studies of Ancient Iraq,
Kokushikan University